

機関番号：82610  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20592533  
 研究課題名（和文） 臨床看護師による実践への研究成果活用支援システムの開発－EBN 推進に向けて－  
 研究課題名（英文） Development of a research utilization improvement system for clinical nurses toward achieving evidence-based nursing  
 研究代表者  
 亀岡 智美（KAMEOKA TOMOMI）  
 独立行政法人国立国際医療研究センター・国立看護大学校・教授  
 研究者番号：50323415

研究成果の概要（和文）：第1に、臨床看護師が、看護実践への研究成果活用に関わる能力を自律的に改善するために活用できる「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」を開発した。第2に、開発した尺度を用いた測定を通し、臨床看護師の研究成果活用とそれに関わる能力の現状、研究成果活用に関わる能力に関係する因子を解明した。第3に、第1と第2の成果の統合、オートポイエーシス理論と Theory Derivation の適用により「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム・モデル」を開発した。

研究成果の概要（英文）：Firstly, a self-evaluation scale of competence in research utilization was developed for nursing practice. Secondly, the current status of nursing research utilization, competence in research utilization, and related factors were identified through a survey. Thirdly, a system model for research utilization improvement for clinical nurses was developed, in which the first and the second outcomes of the research were integrated, and Autopoiesis System Theory was used with theory derivation procedure.

#### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：看護教育学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護師、研究成果の活用、尺度開発、看護教育学

#### 1. 研究開始当初の背景

医療の進歩や複雑化、人々のニーズ多様化の急速な進展等を背景とし、安全かつ個別的・効果的な看護の確実な実施がますます重要になっている。また、そのためには、エビデンスに基づく看護（EBN）を推進する必要がある。さらに、EBN 推進に向けては、看護職者による実践への研究成果活用が不可欠である。特に、看護職者の圧倒的多数が病院に就業して看護実践に携わっていることか

ら、臨床看護師による実践への研究成果活用の促進が重要である。

しかし、先行研究は、臨床看護師が実践への研究成果活用に苦慮していること、多忙な業務と並行して研究を遂行し病院内外にその成果を発表しているにもかかわらず、研究成果の活用を不十分と知覚していること等を明らかにしている。また、臨床看護師の研究成果活用の促進・阻害要因を解明するとともに、それらを踏まえた組織的な取り組みが、

個々人の実践への研究成果活用に必要な能力の向上なくして成功しないことも明らかになっている。これらは、臨床看護師の実践への研究成果活用に関わる能力の向上が、EBNの推進に向けて不可欠であることを示す。

臨床看護師個々が実践への研究成果活用に関わる能力を向上していくためには、その研究成果活用状況を自己評価することが不可欠であり、この自己評価を行動の改善に結びつくものとするためには、信頼性・妥当性を備えた尺度の活用が効果的である。しかし、研究の開始当初、臨床看護師個々が、研究成果活用状況の改善に向けて活用できる自己評価尺度は開発されていなかった。

## 2. 研究の目的

エビデンスに基づく看護（EBN）の推進に向け、次の3点の目標の達成をめざした。

(1) 臨床看護師が実践への研究成果活用状況を改善するために活用できる自己評価尺度を開発する。

(2) 開発した尺度を用いた臨床看護師の実践への研究成果活用の現状及び関係する因子を解明する。

(3) (1) (2)の成果の統合を通し「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム」を開発する。

## 3. 研究の方法

(1) 「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」の開発

①文献検討を行い、臨床看護師が、看護実践への研究成果活用に関わる能力の向上に活用できる自己評価尺度を開発する意義を確認し、研究の理論的枠組みを構築した。②①の理論的枠組みに基づき、看護実践場面における研究成果活用を概念化した質的帰納的研究（野本，2004）の成果を基盤に、35質問項目の作成・尺度化・レイアウトを行った。③内容的妥当性確保に向け専門家会議とパイロットスタディを行った。④全国の看護師を対象とする調査を行い、項目分析による質問項目の適切性の検討、因子分析による下位尺度の構成、クロンバック $\alpha$ 信頼性係数算出による内的整合性の検討、既知グループ技法による構成概念妥当性の検討を行った。

(2) 臨床看護師の実践への研究成果活用の現状及び関係する因子の解明

①文献検討を行い、看護師の研究成果活用力に関係する可能性の高い変数を抽出し、研究の概念枠組みを構築した。②「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」開発のために収集したデータを用い、変数「研究成果活用状況」への回答に関し統計学的分析を行

った。③概念枠組みが包含する変数と研究成果活用力の関係性を統計学的に分析した。

(3) 「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム」の開発

①システム開発のための理論的枠組みを構築した。②オートポイエーシス理論（マトゥラーナ他，1996）に Theory Derivatio (Walker 他，1995) を適用し、「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム」を開発した。

## 4. 研究成果

(1) 「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」の開発

全国 38 病院に就業する看護師 860 名を対象とする調査を行い 447 名（回収率 52.0%）から回答を得、このうち有効回答であった 403 部、及び、パイロットスタディの有効回答 55 部を合わせた 458 部を分析対象とした。対象者の年齢は平均 38.1 歳、臨床経験年数は平均 15.5 年であった。「3. 研究の方法」の(1)①から④を実施した。その結果、6 下位尺度 35 質問項目から成る「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」が完成した。6 下位尺度とは、「Ⅰ. 看護実践の改善につながる研究成果を探索しその質を見極める」（7 質問項目）、「Ⅱ. 研究成果活用の是非を多角的に検討する」（7 質問項目）、「Ⅲ. 関係者の理解を得ながら新たな看護方法の導入を進める」（8 質問項目）、「Ⅳ. 新たな看護方法の導入に向けて環境を整える」（2 質問項目）、「Ⅴ. 効果を査定しながら導入した看護方法の浸透を図る」（7 質問項目）、「Ⅵ. 看護方法の変更に伴う問題に対応する」（4 質問項目）である。クロンバック $\alpha$ 信頼性係数を算出した結果は、尺度全体が 0.963、各下位尺度が 0.790 から 0.928 であり、これらは、尺度が内的整合性による信頼性を確保していることを示した。また、既知グループ技法による構成概念妥当性の検討に向け、研究成果活用頻度、及び、論文閲覧量の 2 変数各々と尺度得点との関係性を探索した。その結果、いずれも統計学的に有意な関係を認め、このことは、尺度が構成概念妥当性を確保していることを示した。

(2) 臨床看護師の実践への研究成果活用の現状及び関係する因子の解明

(1)の尺度開発時に 458 名の看護師から収集したデータを分析した。対象者の研究成果活用状況は、「よく活用している」15 名 (3.3%)、「時々活用している」192 名 (41.9%)、「全く活用していない」218 名 (47.6%)であった。また、「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」1 質問項目あたりの平均得点は 2.77 であった。下位尺度の 1 質問項目あたりの平均得点は、下位尺度Ⅵが 3.16 と最も高

く、以下、IV (2.85)、I (2.79)、V (2.75)、III (2.66)、II (2.65) と続き、VIを除き全て3点を下回った。これらは、病院に就業する看護師が、看護実践に研究成果を十分活用しているとはいえ、その能力向上を課題としていることを示した。また、「研究成果活用力自己評価尺度—臨床看護師用—」の6下位尺度を説明変数、研究成果活用状況を目的変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果は、下位尺度I ( $\beta=0.387, p<0.001$ )とII ( $\beta=0.150, p<0.01$ )が研究成果活用状況に影響していることを示した(調整済み  $R^2=0.245, F=69.961, p<0.001$ )。これは、病院に就業する看護師が、看護実践への研究成果活用に向け、特に、看護実践の改善につながる研究成果を探索しその質を見極める能力、研究成果活用の是非を多角的に検討する能力の向上を必要としていることを示した。

さらに、文献検討に基づき看護実践への研究成果活用に関わる能力に係る可能性の高い28変数を抽出し、この28変数と研究成果活用力の関係を探した。看護師403名から収集したデータを分析した結果は、28変数のうち19変数が看護実践への研究成果活用に関わる能力に統計学的に有意に関係していることを明らかにした。この19変数とは、①職位、②教育・指導役割、③研修会参加への積極性、④専門誌の閲読、⑤1週間あたりの学習時間、⑥年間学会参加回数、⑦看護研究についての知識、⑧研究の重要性に対する価値づけ、⑨看護研究に関する看護師になってからの学習経験、⑩研究成果活用を意識する機会の有無、⑪研究成果活用に関する看護師になってからの学習経験、⑫研究遂行経験の有無、⑬研究発表経験回数、⑭職場での研究活動に対する積極性、⑮看護実践への研究成果活用状況、⑯院内教育の充実度、⑰研究への上司からのサポート、⑱研究への同僚からのサポート、⑲同僚と研究について話す機会である。

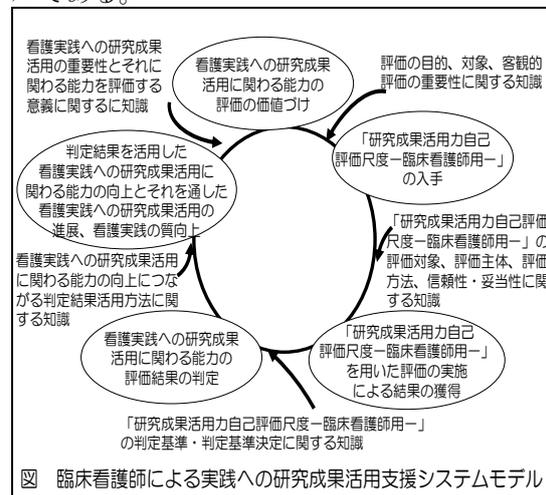
また、この19変数に関する結果は、看護実践への研究成果活用に関わる能力の高い看護師が、次のような特性を備えていることを示す。それは、①副看護師長の職位にある、②教育・指導役割を担っている、③研修会参加に積極的である、④専門誌をよく読んでいる、⑤1週間に3時間以上学習している、⑥年間3回以上学会に参加している、⑦看護研究についての知識が豊富である、⑧研究の重要性を価値づけている、⑨看護師になってから看護研究について系統的に学習した経験がある、⑩研究成果活用を意識する機会があった、⑪看護師になってから研究成果活用について学習した経験がある、⑫研究遂行経験がある、⑬研究発表経験が3回以上ある、⑭職場での研究活動に積極的である、⑮看護実

践に研究成果をよく活用している、⑯院内教育の充実した職場に所属している、⑰研究に対する上司からのサポートを得られる、⑱研究に対する同僚のサポートを得られる、⑲同僚と研究について話す機会がよくあるという特性である。

さらに、文献と照合しこれらの特性を考察した結果、「リーダーシップや教育的機能を発揮する役割の獲得状況」、「学習への積極性や最新の研究成果に触れる機会の獲得状況」、「研究に対する理解や価値づけの程度」、「研究やその成果活用に関する学習機会の獲得状況」、「研究とその成果活用への積極性と実施状況」、「研究に対する職場の理解やサポート状況」が、看護師個々の研究成果活用力に影響している可能性を示唆した。

### (3) 「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム」の開発

「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム」の開発につながるモデルを構築した。このモデル構築にあたっては、オートポイエーシス理論(マトゥラーナ他, 1996)にTheory Derivation (Walker 他, 1995)を適用して開発された「看護学教育評価システムモデル」(舟島他, 2000)を参考にした。構築された「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システムモデル」(図)は、臨床看護師が、実践への研究成果活用に関わる能力を自己評価することを支援し、看護師個々がその能力向上を通して、看護実践への研究成果活用の進展を実現するためのモデルである。



この「臨床看護師による研究成果活用支援システムモデル」は、5種類の活動、及び、それらの活動を支える5種類の知識のネットワークによる6段階の過程から構成される。また、このシステムモデルを活用する臨床看護師が、6段階の過程に含まれる活動と知識を満たしたとき、「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム」が実現す

る。すなわち、①臨床看護師は、看護実践への研究成果活用の重要性とそれに関わる能力を評価する意義に関する知識を得ることにより、看護実践への研究成果活用に關わる能力の評価を価値づける。②看護実践への研究成果活用に關わる能力の評価を価値づけた臨床看護師は、その目的、対象、客観的評価の重要性に関する知識を得ることにより、「看護実践への研究成果活用に關わる能力の評価」という目的に合致した方法を探索し、「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」を入手できる。③「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」を入手した臨床看護師は、このスケールの評価対象、評価主体、評価方法、信頼性・妥当性に関する知識を得ることにより、適切に「看護実践への研究成果活用に關わる能力」を評価し、結果を獲得できる。④評価結果を獲得した臨床看護師は、「研究成果活用力自己評価尺度－臨床看護師用－」の判定基準と判定基準決定に関する知識を得ることにより、看護実践への研究成果活用に關わる自己の能力を適切に判定できる。⑤評価結果を判定した臨床看護師は、看護実践への研究成果活用に關わる能力の向上につながる判定結果活用方法に関する知識を得ることにより、判定結果を活用し、自己の能力向上を図ることができる。⑥臨床看護師個々が、看護実践への研究成果活用に關わる能力の向上を図ることは、看護実践への研究成果活用の進展、看護実践の質向上を実現する。臨床看護師は、看護実践への研究成果活用の重要性とそれに関わる能力を評価する意義への理解を深め、そのことは、看護実践への研究成果活用に關わる能力の評価をより強く価値づけ、それに関わる活動を継続する。「臨床看護師による実践への研究成果活用支援システム」は、このような①から⑥の活動のネットワークが形成されることにより実現する。

#### 【引用文献】

- (1)H. R. マトゥラーナ・F. J. ヴァレラ;河本英夫訳：オートポイエーシス－生命システムとは何か、国文社、1996.
- (2)Walker, L. O. & Avant, K. C. :Strategies for Theory Construction in Nursing, Appleton, & Lange, 171-182, 1995.
- (3)野本百合子・定廣和香子・舟島なをみ：看護実践場面における研究成果活用の概念化－病院に就業する看護師の経験を通して－, 看護教育学研究, 13(1), 23-26, 2004.
- (4)舟島なをみ・杉森みど里編著：看護学教育評価論, 文光堂, 2000.

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ① 亀岡智美、野本百合子、中山登志子、「研究成果活用自己評価尺度－臨床看護師用－」の開発－信頼性・妥当性の検証－、日本看護教育学会 20周年記念大会、2010年8月24日、前橋テルサ (群馬県)
- ② 亀岡智美、舟島なをみ、野本百合子、鈴木美和、中山登志子、病院に就業する看護師の研究成果活用に關する研究－研究成果活用能力と活用状況の關係に焦点を当てて－、第30回日本看護科学学会学術集会、2010年12月4日、札幌コンベンションセンター (北海道)
- ③ 亀岡智美、「研究成果活用能力自己評価尺度－臨床看護師用－」開発の意義と展望、日本看護教育学会第19回学術集会 (シンポジウムにおける発表)、2009年8月9日、千葉市民会館 (千葉)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

亀岡 智美 (KAMEOKA TOMOMI)

独立行政法人国立国際医療研究センター・国立看護大学校・教授

研究者番号：50323415

##### (2) 研究分担者

舟島 なをみ (FUNASHIMA NAOMI)

千葉大学・大学院看護学研究科・教授

研究者番号：00229098

中山 登志子 (NAKAYAMA TOSHIKO)

千葉大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：60415560

鈴木 美和 (SUZUKI MIWA)

天使大学・看護栄養学部・准教授

研究者番号：20396691

##### (3) 連携研究者

野本百合子 (YURIKO NOMOTO)

愛媛県立医療技術大学・保健科学部・教授

研究者番号：60208402